

## 告別式

### 恩師の葬儀での弔辞文例

「石田先生、先生のご急逝<sup>きゅうせい</sup>はほんとうに思いがけないおどろきでございました。ついこの間までお元気であたたかいご教示のおことばをくださっていたのに、なんという悲しいこと<sup>おんよう</sup>でございましょう。もはや、私たちは二度と先生の温容<sup>あたたか</sup>を仰ぎみることはできなくなってしまいました。今はただ茫然<sup>ぼうぜん</sup>として、かつての先生のおことばの節々を思い返し、かみしめているだけでございます。

先生は、学問のみならず、人間の生き方においても、自分の好むところ、よいと思うことを一生けんめいにやれ、とお教えてくださいました。私どもが少しでも行きすぎたことをいたしますと、先生はいつも笑いながら、私どもをしずかに引きとめてくださいました。

そのときの先生のお心のなかを今、ここではじめて思い至りまして、どんなに先生が私どものことを思っ

ていてくださったか、大きなあたたかい心で包みながらお導きくださっていたか——そのありがたさが今さらに身に沁みるのでございます。

この悲しい日に、思い出されるのは、先生とともに過ごした楽しい日の思い出です。

これから先、私どもは先生をめいめい勝手なお姿として心のなかに守らせていただくより他に術（すべ）はありません。

ただ、私どもは二度とない人生で、先生にお会いできたばかりか、親しくお教えをいただいたことを、心からしあわせだと思っております。私どもすべての者がこれから先も長く、おそらく永遠に持ちつづけていく誇りであるとも思っております。

ありがとうございました」

### 社長の葬儀での弔辞文例

「春はまだ浅く、寒気身に沁みるとき、にわかには本社、内山正治社長の急逝<sup>きゅうせい</sup>にあい、私ども社員一同の驚き、悲しみ、これにまさるものなく、ただ暗夜<sup>あんや</sup>に灯を失った思いでございます。

内山社長は、じつに私たち社員にとりまして、慈父のような存在であられました。私たちは社長を中心に一団となって、社長の指揮のもとに一生けんめいに働いてきたのです。

社長は、仕事に完全を期するきびしさのあった一面、社員<sup>しつぱく</sup>の心を押しはかって、ときに失策をゆるし、ときに悩みや相談ごとの相手になってくれて、私たちが少しでもよりよい人生、よりよい生活を過ごすことをつねに念頭においておられました。

年度計画達成のために陣頭<sup>しんとう</sup>に立って叱咤<sup>しつた</sup>激励されるばかりか、みずから奮闘努力され、それが社員一同の士気を鼓舞<sup>こぶみ</sup>して、みごと目標を達したとき、その温顔<sup>あたたか</sup>は涙に溢れ、社員一人ひとりに握手をくださったことがありました。その手のあたたかさ、心からいたわり喜んでくださったあのお顔——今、思い出しても懐し

く、悲しみに胸もふさがる思いがいたします。

「仕事は敏速<sup>びんそく</sup>に、だが心には余裕をもて」と社長はつね日ごろ、口ぐせのように私たちに教えてくださいました。

職場でも、社長室でも、いつも笑顔で、ときどき私たちをどっと笑わせるようなユーモアにみちた社長、いまさらながらあの海のように心の広がった社長の偉大さが偲ばれてなりません。

いつまでも末長くご指導<sup>しんどう</sup>いただきたかったのに、突然帰らぬ旅に立たれてしまったこの運命の無情はどこに恨みをぶつけてよいのでしょうか。

しかし社長、私ども社員一同は、社長の残された会社への大きな使命を受け継ぎ、ありし日のお教えにしたがって一致団結、志を堅くして社業に邁進<sup>まいしん</sup>することを、ここにお誓いいたします。どうか、私どもの行手を見守ってくださるようお願いいたします。

社長、お名残りは尽きませんが、どうぞやすらかなご冥福<sup>めいふく</sup>をお祈り申し上げます。」